九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国漢民族居住地における「新疆高校クラス」の実態

アイネル，バラティ
西南学院大学 ： 博士課程

https://doi.org/10.15017/2344801

出版情報：九州人類学会報. 42, pp.94-113, 2015-06-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

【研究報告】
2014年度九州人類学研究会オータムセミナー報告

中国漢民族居住地における「新疆高校クラス」の実態

アイネル・バラティ（西南学院大学大学院博士課程）

Ⅰ　はじめに

中国政府が1978年から改革開放政策を実施したことにより、1980年代後半から中国経済は著しく発展し、各地域の人口移動も顕著になった。中国各地域における人口移動の背景には国家政策によるものと自主選択によるものがあり、内陸部の漢民族地域から沿海地域や北京・上海といった発展地域への出稼ぎによる労働人口の移動が主流であった。同時に、商売や建設業を主とした漢民族の「農民工」[1]たちの各少数民族地域への大規模な移動も実在していた。

80年代以降の新疆ウイグル自治区[2]における人口移動は、四川省、甘粛省といった人口が比較的多く、経済発展が遅れている地域からの漢民族の流入が主流であった。漢民族が移動した結果、商売などで生活拠点を新疆に移すことで移動先に留まることになり、新疆における漢民族の人口が増加することとなった。新疆ウイグル自治区では2004年末には55の少数民族が居住しており、主な民族は、ウイグル族、漢族、カザフ族、回族、モンゴル族、キルギス族、タタール族、タジク族、ウズベク族、ダウル族、シボ族、満州族、ロシア族の13民族である[新疆維吾爾自治区概況』編者組　2009:18]。2011年の統計では、総人口が2181万5815人、うちウイグル族は1006万9346人で、総人口の46.1%を占めており、漢民族人口は876万6148人で、総人口の40.1%を占める[3]。

多数派人口が少数派地域に移動することで、新疆各地では少数民族と漢民族の交流が必要となり、少数民族の人々が漢語を学ぶ動きが目立つようになった。また同時に、少数民族の言語習得に伴った文化接触が起こり、少数民族文化が漢文化の影響を大いに受けることとなった。

---

[1] 工業を従事する農民たちを指し、「盲流」「民工」と呼ぶこともある。
[2] 以下「新疆ウイグル自治区」を「新疆」ともいうことにする。
[3] 中華人民共和国統計局 http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm （アクセス日　2015年3月31日）

一方では、進学や就職、及び商売などの目的で、新疆ウイグル自治区の少数民族人口が漢民族地域に移動するという状況も出現した。特に 2000 年以降、進学を目的とする移動が増加し、大学のみならず高校進学を目的とする少数派人口の多数派地域への移動が増えた。この人口移動の背景には、中国政府の少数民族に対する教育政策、すなわち言語教育政策があると考えられる。

改革開放以来、中国政府は中国全土において漢民族に対する「普通話」[4]普及政策と少数民族に対する「双語教育政策」[5]を実施してきた。よって、新疆ウイグル自治区における漢語教育も徐々に強化され、ウイグル族の間で積極的に漢語を学ぶ状況が出てきた。さらに「双語教育政策」の１つとして、少数民族の生徒が漢民族居住地域で高等教育を受けるという教育政策が実施され、2000 年 9 月に北京や上海などの漢民族居住地における一部の中学[6]の高等学部において「新疆班」（以下「新疆高校クラス」とする）が設置された。具体的には、新疆ウイグル自治区における少数民族の生徒は中学卒業後、試験に合格すれば新疆クラスに入学することができ、１年間漢語を学んだ後、高校の授業を３年間受ける。つまり高校で 4 年間就学するカリキュラムとなっている。

本報告では、新疆ウイグル自治区の少数民族の移動、主に少数派が多数派地域に移動して受ける高等教育による民族共生に着目し、ウイグル族の生徒たちが高校生活の中で、自らの言語と民族文化の維持に対してどのような意識を持っているかについて焦点を当て「新疆高校クラス」の実態を捉えたい。少数民族の生徒たちが漢民族居住地域に移動することによって母語を使用する機会が減り、自らの民族文化と接触する機会も減った中での言語使用状況を把握するとともに、民族アイデンティティの維持と継承に対する考えも把握し、民族移動と教育の関連を考察する。

Ⅱ 研究の目的と先行研究について

1 研究の目的

[4] 中国の共通語のことを指し、北京地区の方言を基本としている。
[5] 中国における各少数民族が自らの言語を学習すると同時に漢語を学習するという二言語教育政策、すなわち漢語教育政策である。
[6] 中国の中学では、初級中学部（日本の中学校にあたる）と高級中学部（日本の高等学校にあたる）が存在するため、以下 XX 中学の初中部と高中部と称する。

上述した通り、1950年代以降「双語教育」が全面的に展開され、新疆ウイグル自治区の各地域おける小中学校の漢語教育に対しても各段階において改革が行われた。2000年からは漢民族地域に「新疆高校クラス」が設置され、漢語教育がさらに強化された。筆者はこれまで、新疆への人口流入による漢族人口の増加に伴って少数民族の漢語習得の必要性が高まったことに着目し、新疆における少数民族の漢語学習状況を調査し、少数民族地域における言語習得と文化接触について考察を行ってきた。筆者が中国の「双語教育」を重視し、少数民族教育の全体の中で「双語教育」を取り上げるきっかけとなったのは、藤山正二郎の「ウイグル語の危機」(1999)を読んだことである。その後帰国した際子供たちの言語使用状況に注意するようになり、漢語学習とウイグル語の使用状況との関連性を考えるようになった。複数回実施した現地調査から、漢語学習がウイグル族の言語使用状況に大きな影響を与え、同時に伝統ウイグル文化の維持と継承についても大きな影響を与えることが理解できた。さらに日本での文化人類学及び教育学における研究方法や理論展開について参照し、これまで焦点が当てられなかった言語学習後の言語文化と宗教文化の変容について研究を行うことの重要性を認識した。

具体的には、親と子供世代の言語使用意識と言語使用状況と、親と子供世代の生活様式と宗教信仰の度合いを把握し、宗教文化の維持と継承などを明らかにするために、アンケート調査とインタビュー調査を行い、言語教育と言語使用状況の関係、言語教育と宗教文化の関連性について考察してきた。

本報告では、中国政府が国民国家への統合を図るために実施している「双語教育政策」が、ウイグル族のアイデンティティの維持と継承に大きな影響を与えたことを明らかにしていきたい。このようなことは、自らの民族アイデンティティについて、さらには自己の文化をどのようにして維持継承していくかといった点では重要ではないかと考えている。

そこでこれまでの研究をもとに、まず中国や日本における文化人類学や教育学の先行研究を整理し、筆者の研究の位置づけを明らかにした。その上で、少数民族の生徒たちが地元を離れて内地[7]で高校生活を送ることによって、彼らの言語意識と民族意識はいかに変化するのかという点に注視し、教育と文化の

[7] 漢民族居住地を指す、以下漢民族居住地と称する。

関連性と、言語教育と民族アイデンティティの維持について考察する。具体的には「深圳市松崗中学」における「新疆高校クラス」の実態を調査することで、ウイグル族の生徒たちの日常生活、漢民族生徒たちとの交流、学校における言語使用状況、民族の祭りのすごし方などを把握し、彼らの民族アイデンティティの維持について考えたい。

2 先行研究について

中国の少数民族地域の「双語教育」については、中国では社会学、教育学の分野で研究が進められている［王ほか 2001、金 2005、武 2004］。これらの研究の方向性として、少数民族の漢語教育を強化させることの重要性に重点がおかれており、例えば、王振本ら(2001)は新疆ウイグル自治区の少数民族に対する漢語教育に関する問題提起と分析を行い、少数民族の「双語教育」を強化することを意図している。具体的には音声、語彙、文法などの教え方、また聴解力、会話力と読解力となどの言語技能を身につけさせる方法や措置などを考察し、漢語教育に関する教材の編集と出版、教育をレベルアップするための漢語教育の人材育成といった内容を取り上げている。しかし、少数民族の漢語教育を強化させる措置と方法について考え、漢語教育と民族文化の関連性などについての検討はなされていない。

また『多元文化整合教育視野中的維漢双語教育研究』(2011)において、艾力・伊明は、歴史学と人類学の解釈を手本に、文化人類学のフィールドワークの方法を用いて、特定の地域、特定の民族の言語文化について研究し、民族教育と「双語教育」の発展過程、およびその特徴と意義に関して教育人類学の角度から分析を行っている[艾力・伊明　2011：6]。和田(ホータン)地域をフィールドワークの対象とし、当該地域の特徴と教育状況または「双語教育」の状況を述べ、漢語教育の必要性と漢語教育に影響を与える要因を分析している。そして最後にホータン地域における「双語教育」の発展動向と対策を考え、「双語教育」の理論研究に力を入れて少数民族が漢語学ぶ同時に漢民族が少数民族の言語を学ぶことを奨励している。しかし本書でも、漢語教育が民族文化の維持と継承のあり方に与える影響などを考察することはなかった。

羅吉華の「内地新疆班文化適応与教育対策」[滕星、張俊豪(編) 2009：345-453]では、教育人類学の立場から漢民族地域における「新疆高校クラス」生徒たちに対して調査を行い、彼らの文化適応をといった教育と文化の関連を考えた比較的新しい論文である。羅は、文化適応の４段階、すなわち、①新鮮感や好奇心を持ち幸福感を抱く段階(Euphoria Stage)、②カルチャーショックを受ける段階(Cultural Shock Stage)、③カルチャーストレスを受ける異常段階(Anomie Stage)、④同化するあるいは適応する段階（Assimilation　or Adaptation Stage）に関して説明している。彼は「新疆高校クラス」の生徒たちの文化適応を以上の４段階の中で、第１段階の好奇心を持つ段階から文化適応に力を入れることによって、第２段階のカルチャーショックを軽減できると主張する。そうすれば、生徒たちが２年次以降は文化適応がスムーズに実行し、年齢が低ければ低いほどカルチャーショック受ける機会が少なくなると考えている。そして、「新疆高校クラス」の生徒たちの文化適応の過程で存在する問題を①自然環境における不適応、②物質的環境における不適応、③文化や社会環境における不適応、④社会地位、人間関係における不適応としてまとめている。またこれらの不適応に対して以下の４点によって問題追及を行っている。つまり、①文化の不連続性と文化適応、②エスニックグループ [8]の一体感と文化適応、③言語類型の差異と文化適応、④「文化自覚」意識の目覚めと文化適応、ということである。多文化教育の背景においては、「新疆高校クラス」の文化適応について、以下のような教育対策を提唱している。①政府が教育を推進し、「新疆高校クラス」の展開を制度的に保証し、少数民族生徒の文化適応について研究する必要性を重視し、「新疆高校クラス」がある学校間で交流を深める。②学校の多文化状況に注目し、カルチャーショックを軽減する策を考える。③心のケアに注目し、生徒の文化適応を手助けする。④生徒たちに対する事前教育を強化し、文化適応を促進させる。⑤多文化教育改革を実施する。⑥「新疆高校クラス」の生徒たちは生活習慣、生活様式が異なる地域で学校生活を送る中、異文化適応は困難であるが、自ら異文化適応促進することに努めることが必要である。本論文は「新疆高校クラス」の少数民族生徒たちの文化適応について教育人類学の視点から考察を加え、漢民族地域における高校生活に早くなれるための方策や措置

[8] 中国語では、英語の Ethnic group が「族群」と訳されている。

などを理論的に検討しているが、これまでの研究では少数民族の生徒たちが漢民族と同じ教育を受けることで彼らの民族アイデンティティ、民族文化の維持と継承に関する考え、教育が民族文化のあり方に与える影響についての考察は行われていない。

このように従来の中国における先行研究では、少数民族に対する漢語教育の現状とあり方に重点をおかれているものが多く、言語を学ぶ側の視点とその内面的変化に対する論点が欠落している。

中国における少数民族教育、すなわち新疆ウイグル自治区における「双語教育」については、日本国内でも経済学、教育学、社会学の分野で研究が行われている。この分野では主に以下の研究が挙げられる。

岡本雅享の『中国の少数民族教育と言語政策』(1999)では、第 1 部において中国の少数民族教育の概況と特徴を考え、現代中国の少数民族語政策が述べられている。第 2 部で中国各地、各民族の民族教育を考え、その一部として新疆ウイグル自治区における民族教育を取り上げている。20 世紀前半のトルコ系ムスリムの教育として、清王朝時代から中華人民共和国時代までの教育状況取り上げ、次は、中華人民共和国おける新疆トルコ系諸民族教育、言語政策を検討し、最後は、新疆ウイグル自治区の北部に位置しているイリ・カザフ自治州のシボ族の教育言語教育状況について検討している。本書は、少数民族の言語教育政策について考え、中国の各少数民族の教育状況と手掛かりに教育政策の機能と目的を検討する好著であるが、少数民族の漢語を習得による、民族の伝統文化への影響を検討しているとはいいがたい。

丸山孝一の『周縁文化の視座　民族関係のダイナミックス』（2010）は、その第 3 部において、中国少数民族文化の維持と変容をテーマに、中国の 56 の民族を同定した経緯と民族認定の基礎を考え、中国の民族概念を明らかにすると同時に、「中国民族」という言葉は、今日の「中華民族」のことであり、中国国内の各民族の総称であると解釈している。中国の民族識別工作において、漢民族ではない人々に対する識別作業が行われ、55 の少数民族に属さない人々が漢民族とみなされたことを指摘し、中華民族概念のダイナミズムを明らかにしている。中国少数民族の文化と教育の諸問題の枠組みにおいて、国家は自身の存続を図るために、学校教育制度を普及させているのが普通であり、特に多民

族社会において、民族文化の相互関係及びドミナント文化とマイノリティ文化の関係調整が重要な課題となると指摘する。次には中国少数民族政策について考察を行い、新疆ウイグル自治区における民族学校の教育状況、具体的には首府のウルムチ市内にあるカザフ族学校である第二中学の取り上げ、ナショナリズムと民族文化の実情について検討している。これらは、筆者の研究において、文化と教育の関連性を考える手本となる研究方法であり、ウイグル文化と国民教育とも言える「双語教育」の関連性を明確にするための重要な文献であると考える。しかし、新疆ウイグル自治区の主要な民族であるウイグル族の「双語教育」の各段階に焦点を当てることがなく、漢語習得と民族文化の維持や継承の関連性を取り上げてはいない。

祖力亜提・司馬義、吾買爾江・艾山の「新疆自治区における「民考漢」と教育言語問題－新疆大学中心に」（2012）では、第 7 章において、経済問題と密接な関連を持つ企業家育成の場である新疆大学の例を中心に、「新疆ウイグル自治区における‹民考漢›[9]と教育問題」を取り上げている。具体的には、新疆大学の「民考漢」学生たちへのインタビューを取り上げ、小学校から漢民族学校に通った少数民族学生の考えを理解することに力を注いでいる。また政府による「双語教育」政策の実施により、新疆大学の「双語教育」モデルが変わることで、以前は少数民族言語で授業していた教員たちが漢語で授業することが決定されたので、教員たちの考えを理解することにも力を注いでいる。教育モデルの転換がキャンパス文化に与える影響について、少数民族学生自身の言語能力への自己評価、漢民族と少数民族の交流状況などについて調査を行っており、学校における「双語教育」に関する文献である。だが、新疆ウイグル自治区における大学の漢語教育状況に重点が置かれているため、筆者は少数民族が漢民族地域への移動した際の学校教育状況についての研究も必要であると考えている。

崔淑芬の『中国少数民族の文化と教育』（2012）では、中国における少数民族教育政策が民族の伝統文化に与える影響を理論的・実践的に分析し、民族文化と教育の実情を明らかにしている。朝鮮族、モンゴル族、回族とウイグル族、雲南省の白族とナシ族、またチベットの教育と文化というテーマで、教育政策、

[9] 漢民族学校に通う少数民族学生という意味である。

教育状況と民族文化について検討がなされている。新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の教育と文化を検討する際には、「双語教育」状況について考察を行い、漢語教育の問題点などを取り上げ、漢語で授業教えることができる教員の養成を担っている新疆教育学院で行った調査報告を取り上げている。その研究目的は少数民族教育が民族の伝統文化に与える影響を試みるとしているが、「双語教育」を受けて漢語習得した少数民族の教員や生徒たちの民族アイデンティティに対する意識、民族伝統文化の維持と継承に関しての考えは十分とは言えない。

以上の先行研究より「双語教育」の強化に対する対策を提唱することに重点がおかれ、言語教育と少数民族文化、民族アイデンティティとの関連性を考えることがなかったことや、文化人類学の理論を基本とする研究でありながら、現地の状況を把握することが困難であるために「双語教育」の受け手の生の声が取り上げられず、実態を詳細に分析することができなかったことを問題点として考えることができるだろう。よって筆者は、中国と日本で行われた先行研究を参考にし、ウイグル族生徒たちの漢民族居住地域への移動による言語習得や異文化学習を学ぶ側である生徒たちへのアンケート調査とインタビュー調査を通じて把握する。その上でエスニックアイデンティティ及び教育が民族文化の維持と継承に与える影響について論じることとする。

Ⅲ 中国における「双語教育」の実情 ― 新疆ウイグル自治区の場合

1 新疆ウイグル自治区における「双語教育」の流れ

中国における少数民族教育の実施と進展プロセスは、民族教育の確立時期(1949-1956)、社会主義改造が一段した大躍進政策時期(1957-1965)、文化大革命時代の停滞期(1966-1976)、民族教育の新発展時期(1978-1992)、初等教育の普及問題が国家的な問題であると認識されるに至る時期(1993-現在)の 5 段階にわけて分析される[小川佳万 2001：10-11]。 以下、王振本、梁威、阿布拉・艾買提、張勇著『新疆少数民族双語教学與研究』(2001)及び金星華著『中国民族語文工作』(2005)を参考に、新疆ウイグル自治区における「双語教育」の流れについて簡単にまとめることにする。

中華人民共和国成立後の新疆ウイグル自治区における「双語教育」は、1950年代から始まったとされる。1950年5月、当時の新疆省政府が「新疆の教育改革に関する指示」を発布し、民族言語で授業を行うクラスは第二言語として漢語またはロシア語を選択する、漢語で授業を行うクラスはウイグル語またはロシア語を選択するという方針を打ち出した。

1963年、民族学校の漢語科目と教育要綱が編纂され、1978年から中国政府が改革開放政策を実施したことにより、ウイグル族居住地域における言語教育の新たな動きが始まった。1978年6月には、新疆ウイグル自治区教育委員会が「民族学校における漢語教育を強化する意見」を公布し、漢語教育要綱を編纂し、小学校から中学校までの7冊の漢語教科書をあらためて編纂した。また、小学校4年から高校卒業までに2000の漢字と3500の語彙を覚えることを漢語科目の任務として定めた。

1982年3月「民漢兼通」[10]を漢語教育の方針として、小中学校の漢語教育綱要を改訂し、高校卒業までに覚える漢字を2500～3000字まで、語彙を4500～5000字[11]までと定め、同年4月、新疆ウイグル自治区教育委員会は、「民族小中学校の漢語教育を強化することに対する意見」を公布した。その内容は、①各教育部門と学校担当者は、漢語教育や漢語教師に関心を持ち、漢語教育に対する指導を強化する、②能力がある教師を育成するために、有効な措置を取る、優れた漢語教科書を編纂する、④漢語科目のテストにも注意を払うなどである。

1984年には、新疆ウイグル自治区共産党委員会が、小中学校の漢語教育工作の基本的要求と目標を打ち出した。その内容は、高校卒業までに3000の漢字と5000～6000の語彙を習得して、大学に入学してすぐに直接漢語で授業を受けられるレベルにするという。2年前の方針よりさらに目標が引き上げられ、1995年までに多くの高校生が「民漢兼通」を達成できるように要求されている。それからも新疆ウイグル自治区政府、共産党委員会、教育委員会などから漢語教育の強化に関する意見や規定などが次々と公布され、新疆ウイグル自治区における小中学校の漢語教育は大きな変化と発展を遂げることになった。1992年

[10] 自民族言語と漢語が同時にできるという意味である。
[11] 中国では漢民族の生徒たちは小学校卒業するまでに2500の漢字、中学校卒業するまでは3800の漢字を覚える必要があると考えられている。

から、新疆の一部の小中学校では、「実験クラス」または「双語クラス」が設立され、数学、化学、物理などの科目を漢語で教える実験が始まった [12]。1997 年、国家教育委員会は、「少数民族学校において、中国漢語水平考試（ＨＳＫ）を実施するという通知を公布し、1998 年から新疆、内モンゴル、チベット、吉林、青海などの地域では、少数民族の高中生が大学を受験するときにＨＳＫの成績を漢語の成績として読み替えることが定められた。

新疆ウイグル自治区における「双語教育」をさらに強化し、「民漢兼通」を実現して自らの言語(母語)と漢語(母国語)ができる「人材」育成を促進させる目的の 1 つの段階として、1999 年 9 月、国務院の「少数民族地域の人材育成工作を加速させる」という通知が各教育部門に配布された。教育部は「内地地域では、新疆高校クラスを設置する」という意見を公布し、2000 年の秋から北京、上海、南京、杭州、広州などの経済発展した 12 都市 13 カ所では、新疆高校クラスが設置された [13]。その結果、高等学校入学当時から地元を離れ、少数派地域である新疆ウイグル自治区から、多数派地域の漢民族居住地に移動して、高校生活を送る生徒たちが増加した。

2004 年 9 月から新疆ウイグル自治区のウルムチ、克拉瑪依(カラマイ)、石河子(シハンズ)、奎屯(クイトン)、庫爾勒(コルラ)、哈蜜(クムル)、昌吉（サンジ）と、阿克蘇(アクス) [14]の八の都市において「区内クラス」 [15]が設置された。学制は 3 年完全寄宿制の方式をとっており、現地の漢民族学校の教材を用いて、漢語で授業を行う中学校クラスである。

2　「新疆高校クラス」の実態

2000 年 9 月から漢民族居住地、すなわち、北京、上海、などの 12 都市 13 ヶ所の中学において「新疆高校クラス」を設置し、その年に新疆の各民族生徒

[12] 双語クラス」を設立し、ウイグル語文（日本の国語にあたる）という科目はウイグル語で、数学、科学などの科目を漢語で行うという実験。

[13] 中華人民共和国教育部」http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/（アクセス日 2015 年 3 月 31 日）

[14] これらの地名のカタカナ読みは、ウイグル語読みにしたがって表記している。

[15] 「双語教育」教育を受けて小学校を卒業した生徒たちが、漢語(日本でいう中国語)、数学、漢語文(日本でいう国語)の 3 科目の試験を受けて合格すれば、中学校から全科目の授業を漢語で受ける中学校に入学する。中国では、このクラスのことは「新疆高校クラス」を中国語で「内高班」と称されたことに対して「内中班」と称されている。筆者はこれを「新疆中学校クラス」と称し、今回は「新疆高校クラス」を中心に考えることで、「新疆中学校クラス」について次の課題で考えることとする。

を 1000 人募集した。2002 年 9 月には募集人数が拡大され、1540 人が新しく「新疆高校クラス」の生徒になり、2005 年になると 3075 名の生徒が入学した。設置されるクラスも 25 都市 35 ヵ所に拡大し、新規に入学する生徒たちの数も 2006 年には 3990 人 2007 年には 5000 人に達した[羅吉華 2009: 347]。応募者の数も年々に増加し、2010 年には 4 万人の生徒が「新疆高校クラス」へ応募した [16]。

「新疆高校クラス」の設置に関して「中華人民共和国教育部」の「教民（2000）2 号」 [17]の通知に基づいて、以下に詳しく述べることにする。

「新疆高校クラス」では、生徒たちの 80%以上が少数民族であることが定められており、新疆ウイグル自治区の各地域における中学の初中部からの応募生に対して全国統一の試験 [18]を行い、合格したものを入学させる。合格できた生徒たちは全員寄宿生となり、食費（1 人当たり月 100 元）、医療費（1 人当たり年間 200 元）学生服、雑費と年に 1 回自宅に帰るための交通費を新疆ウイグル自治区人民政府が負担する。少数民族の生徒たちの生活をサポートするために、各高校クラスに新疆ウイグル自治区の少数民族出身の教員 2 名を 2 年間派遣する。家庭の経済状況が苦しい生徒たちに対して、生活費の自己負担分を減免することができる。中学の高中部は本来 3 年だが、「新疆高校クラス」は 4 年間とされ、新疆各地からの各民族の生徒たちを 1 つのクラスに所属させ、初めの 1 年間を予科班とし、中学部の漢語、数学、理科と科学などの科目を履修する。

「新疆高校クラス」が設置された学校には、イスラーム式のハラルを提供とする食堂が設立され、新疆からの少数民族の生徒たちが安全に、安心して食事できることを保証する。

2004 年には第 1 期の卒業生の 98%が大学に進学（専門学校も含む）し、「新疆高校クラス」の設置は大きな成果を挙げたとされている。

Ⅳ　実例報告—深圳市松崗中学の場合

[16] 新疆維吾爾自治区教育庁 http://www.xjedu.gov.cn/xjjyt/jxxw/zhzx/2010/26824.htm (アクセス日 2014 年 10 月 11 日)

[17] 教育部関于印発《関于内地有関城市開办新疆高中班的実施意見》的通知。

[18] 試験科目は以下の通りである。漢民族中学校を卒業した生徒は、数学、英語、漢語文(日本でいう国語)、化学と物理(2 科目を一回の試験で受ける)、歴史と政治(2 科目を一回の試験で受ける)の 5 科目の試験を受ける。中学校の「双語クラス」を卒業した生徒は、数学、漢語文、化学と物理、歴史と政治、漢語(日本でいう中国語)の 5 科目の試験を受けて、合格すれば「新疆高校クラス」に入学する。

1　深圳市松崗中学 [19]について

深圳市松崗中学では 2000 年 9 月に中国で初めて「新疆高校クラス」が設置された。筆者の友人の子弟が本学校の卒業生であったため、学校状況について聞くことができ、他の生徒たちに対しても彼女を通じて聞き取り調査を行うことができたのがこの学校を選んだ理由である。

深圳市松崗中学は、深圳市の宝安区に位置しており、1958 年に設立された学校である。現在の校舎に移動したのは 1999 年のことであり、深圳市松崗中学は深圳市政府が重点的に投資し、建設を行った、全寮制の中学であり、深圳市における「新疆高校クラス」が存在する唯一の中学校でもある。

深圳市松崗中学では 2013 年 5 月の時点で、86 クラス 4461 名生徒が在籍しており、2000 年 9 月に「新疆高校クラス」が設置され、同年度に新疆各地域からの 40 名の生徒たちが入学した。本学校は 2000 年からの 12 年間で 2350 名の新疆からの各少数民族の生徒たちを迎え入れ、1380 名の卒業生を進学させた。2013 年 5 月に 20 の「新疆高校クラス」に 900 名の生徒たちが在籍しており、内 9 割が新疆からの少数民族生徒たちであり、新疆からの漢民族生徒たちは 1 割を占めるにすぎなかった。

深圳市松崗中学では、「新疆高校クラス」の生徒たちに対して、1 年目は予科クラスとして漢語と中学校の各科目の授業を行い、2 年目から本格的に高校の授業科目を教えている。1 年間の学費は 900 元、寮費 420 元、教科書費 220 元、衛生保険日 20 元と定められており、「新疆高校クラス」の生徒たちはすべて無料である（新疆ウイグル自治区政府が負担する）。「新疆高校クラス」の各民族生徒たちの 8 人は全員同じ寮に住んでいる。寮の各設備（トイレ、シャワー室）も整っており、少数民族の生徒たちが学校生活に慣れるために学校側が様々な面でサポートしていた。例えば、「新疆高校クラス」の生徒たちのための専用の食堂を作り、イスラーム式のハラル食を提供しているし、イスラーム式のお祭りなどが行われるときには、「新疆高校クラス」生徒たちのために音楽会などの娯楽会を開催して、彼らが早く現地に慣れるための機会を提供している。2009 年からは「新疆高校クラス」の運営経験をともに、教員と生徒たちの間で絆を

[19] 深圳市松崗中学」
http://sgzx.baoan.edu.cn/listmore.aspx?menuID=0&blockid=58e9ab1b-f615-47
（アクセス日 2014 年 10 月 11 日）

強めることに力を入れると同時に、教育方法を改善させることで、本学生徒の四年制大学進学率が 90%に達したという。

2 「新疆高校クラス」のウイグル族生徒を対象として行った調査報告

2013 年 8 月に「新疆高校クラス」を卒業した 15 名の学生を対象として、アンケート調査またはインタビュー調査行い、彼らの学校生活について、言語使用状況と民族アイデンティティの維持と継承に関する考えなどを把握した。調査の結果を以下の表において報告する。

2-1 学校における言語使用状況ついての調査

	卒業生 15 人（民族学校卒業 2 名、漢族学校卒業 13 名）	
質問	漢語（人）	ウイグル（人）語
ウイグル族の生徒同士の間で使用する言語	0	15
ウイグル族と漢族の間で使用する言語	15	0
授業中に使用した言語	15	0
授業以外で使用した言語	11	4
より流暢に話すことができる言語	15	0
これから学ぶ必要性が高いと思う言語	0	15

（調査結果をもとに筆者作成）

以上の表から見ると、ウイグル族の生徒同士の間でウイグル語を使用することが目立つこともあるが、特に卒業生の 15 人のうち 13 人が漢民族の中学校を卒業しているので、学校における主な言語使用状況は漢語が主になっていることがわかる。それに対して授業以外の時間では、ウイグル語を使う傾向があり、彼らの多くは漢民族の学校を卒業したので、自分が得意な言語が漢語であると思っていることも読み取ることができる。同時に、彼らは「新疆高校クラス」において高校生活を送る中で、自分がこれからは母語を学ぶ必要性があると考えていたとみることができ、小学校から受けた教育が将来の言語使用状況に大

きな影響を与えたとも考えられる。したがって、漢民族学校を卒業した生徒は、これからは彼らが異民族文化の中で、自分がマジョリティである漢民族と異なるウイグル族であると再認識し、ウイグル族であるからウイグル語ができるべきであると考えていたと受け取ることができるのではないだろうか。異文化の中にいたからこそ自分たちの立場をあらためて認識し、自らの言語学ぶ意欲が出てきたと考えてもよいのではないかと考えられる。

2-2　学校生活に関する調査

	卒業生 15 人（民族学校卒業 2 名漢族学校卒業生 13 名）	
質問	はい（人）	いいえ（人）
学校生活に満足していた	12	3
「新疆高校クラス」に入学したことを後悔したことがある	2	13
学校生活に早く慣れた	11	4
ウイグル族の生徒と仲良くしていた	11	4
漢民族の生徒とも仲良くしたいと思った	15	0
漢民族の生徒たちとも仲良くできた	7	8
先生たちが我々のことを気にかけてくれた	13	2
故郷に帰りたいと思う時が時々あった	12	3

（調査結果をもとに筆者作成）

彼らの多くは、「新疆高校クラス」の学校生活に満足しており、自分が入学できたことを誇りに思っている [20]。教師たちのサポートにも満足しており、家族と離れ離れになったが、自分が学校生活に早く慣れたと思っている生徒の数も少なくない。同時に、表からはほかのクラスの漢族の生徒たちと仲良くしたいと思う学生がいながら、学校での交流範囲は「新疆高校クラス」の生徒たちの

[20] 「新疆高校クラス」の進学することは親の意思で実行したと言った。つまり、彼の多くは、親が自分を小学校から漢民族の学校に通わせ、中学校卒業してからも「新疆高校クラス」に進学することを親が決めたという。

間に留まっていることも読み取ることができる。したがって彼らはウイグル族同士で仲良くしているからこそ、学校の生活に早くなれたと考えられるかもしれない。

2-3 民族アイデンティティの維持について

	卒業生 15 人（民族学校卒業 2 名、漢族学校卒業 13 名）	
質問	はい（人）	いいえ（人）
自分がウイグル語を学ぶ意欲がある	14	1
ウイグル族とで行動することが多かった	10	5
ほかのクラスの漢族学生と行動することが多かった	0	15
新疆クラスの漢族学生と行動することが多かった	4	11
ウイグル族と漢民族の生活習慣が大きく違うと感じた	15	0
漢民族の生徒たちと寮での共同生活することは不便だった	9	6
学校の中でカルチャーショックを受けることが多かった	5	10
大学進学し、卒業後に新疆に帰りたいと思った	13	2
自分がウイグル族だと再認識することができた	14	1

（調査結果をもとに筆者作成）

自分はウイグル語を学ぶ意欲があると答えた生徒たちの大半は、漢族の中学校卒業者であり、ないと答えた生徒たちはウイグル族の学校出身者であることから、自分が不得意な言語を学ぶべきであると思っていると考えられる。彼らの多くは、漢民族の生徒たちと寮で共同生活を送るのは不便であると思ってい

るが、カルチャーショックを受けた生徒は少なかった。理由として挙げられたのは、漢民族の生徒たちと生活習慣が大きく違うと思ったにも関わらず、新疆出身であれば、一緒に住むことに対抗がなかったという。したがって、彼らは決して漢文化を異文化として認識していないわけではなく、ほかのクラスの漢民族の生徒と一緒に行動することが極めて少なく、文化接触の機会があまりにも少なかったからではないかと筆者は考えている。この点については今後も検討を続けていくつもりである。

2-4　インタビュー調査結果

「新疆高校クラス」の卒業生に対して、学校生活や生徒同士の言語使用状況について尋ねると、次のように答えてくれた。「最初は新しい学校生活に慣れるのが難しかったが、我々の生活のサポートをしてくれる先生方のおかげで、新しい環境に慣れることができた。我々の中では漢民族の学校に通った生徒が多かったので、はじめは会話のほとんどが漢語だったが、そこで学校生活を送ることによって、自分たちがウイグル族であるという意識が次第に高まり、最後は授業以外ではなるべくウイグル語を使うようになった。ウイグル語の読み書きができない学生の中には、読み書きを学ぶ人もいた」。

そして、ほかのクラスの生徒たちとの交流について尋ねたところ、以下のような回答があった。第 1 に「ほかの漢民族の学生は、我々のことを気にかけてくれた。毎週土曜日の午後に学外に出ることが許可されるので、その時にほかのクラスの生徒たちと一緒に出かけることもあった。「新疆高校クラス」の生徒たちは、自分たち専用の食堂で食事することが決められていたので、安全に、そして、安心して食事することができた」。第 2 に、「我々が「新疆高校クラス」で学ぶことによって、以前は民族学校で教育を受けていた学生たちも、卒業するときには漢語が本当に上手になり、漢民族の生徒たちと友達になる人もいた」。

「両親も漢族の学校を卒業したので、中学校までには学校だけではなく、家でもほとんど漢語で会話していたが、「新疆高校クラス」に入学してからウイグル語学びたい、ウイグル語で交流したいという意欲が芽生え、今は漢語とウイグル語を混ぜながら会話ができるようになった」と回答した学生が一名いた。そして、「学校には我々のことを自分の子供のように思ってくれた漢民族の先生

がいて、卒業の時に涙を流したことを今でも忘れられない」と言った卒業生もいた。

「中学校卒業まで、両親と共に生活していたので、家族から離れたことが私たちにとっては、一番つらかった。しかし、親が私たちの将来のために「新疆高校クラス」に進学することを勧めたので、つらくても自分のためだと思って我慢した。入学してから漢民族の生徒たちと同じ寮に住むことで、漢民族と仲良くもできたが、生活習慣でお互いに大きな違いがあり、不便だと思ったこともかなりあった」と答えた者もいた。

これらのインタビュー調査からは、「新疆高校クラス」の生徒たちが、今でも自分がそこに入学でき、4 年間の学校生活を有意義に送ることできたと思っていることが分かる。彼らは地元を離れて生活することで、自分の生活習慣、言語などの面では漢民族と異なること、そして自分自身がウイグル族でありながらもウイグル語が上手にできないことにあらためて気づいたと言える。したがって、ウイグル語で会話し、ウイグル語の読み書きを学ぶという状況に身を置くことで、民族アイデンティティが確立すると同時に漢民族の先生や生徒たちにも好感を持ち、お互いに仲良くしながら自らの言語、自らの文化を維持していく意欲も出てきたと考えられる。

V　おわりに

中国全土で漢語教育が強化される中、少数民族地域でも漢語学習が活発化し、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族も、積極的に漢語を学んで習得している。その理由として考えられるのは、経済的豊かさを追求するため、また大学への進学や就職と職場における漢語の必要性が高まったことなどである。2000 年から各地に「新疆高校クラス」が設置されたが、ウイグル族の漢語学習に対する熱意が高まって応募者数が増加したので、最初は毎年 1000 人だった、募集人数が拡大されることになった。そこで地元を離れ漢民族地域で高校生活を送ることになった生徒たちは、漢文化の中で漢文化を学ぶことになった。アンケート調査やインタビュー結果によると、学生たちは孝行生活が嫌になるのではなく、そこの生活に適応している。そして自分が「新疆高校クラス」に合格

できたことを誇りに思っており、「新疆高校クラス」に入学できたからこそ良い大学に進学できたと思っていることがわかる。彼らは自分が漢語を習得できたことは自分にとってプラスであり、これを武器に勉強や仕事の面において十分な活用できたと思っている。これらからは言語教育政策の結果は、ある部分、民族融合の促進に役に立っているようである。だが、文化の維持と教育との関連を考えたときに、彼らが漢文化の影響を大いに受けることは、民族アイデンティティの維持には不利な要因となる反面、自分が漢民族と異なる文化や異なる言語を持っているウイグル族であることにあらためて気づくことによって、異文化の中から自らの民族文化を振り返ることができ、民族アイデンティティに対する意識が高まったとも考えられる。

もちろん、この状況は新疆全地域において、例えば地域、家庭教育、個人の考えなどでは大きく違いがあるだろう。特に、都市部と農村部の状況は異なっていると考えられる。また今回の調査では、いくつかの理由で調査対象の数が少なかったため、より多くの調査対象を求める必要があると思っている。今後はこれらの課題について彼らの家庭事情や、地域事情を念頭に入れ、さらに研究を行っていきたいと考えている。

【参照文献】

（中国語文献）

劉維新(編)

1995　『新疆民族辞典』新疆人民出版社。

毛公宁(編)

2007　『新疆研究文論選』民族出版社。

徐曉萍、金鑫

2008　『中国民族問題報告』中国社会科学出版社。

王振本、梁威、阿布拉・艾買提、張勇

2001　『新疆少数民族双語教学與研究』民族出版社。

『新疆維吾爾自治区概況』編者組

2009　『新疆維吾爾自治区概況』民族出版社。

金星華

2005　『中国民族語文工作』民族出版社。
艾力・伊明
2011　『多元文化整合教育視野中的維漢双語教育研究』民族出版社。
羅吉華
2009　「内地新疆班文化適応與教育対策」滕星、張俊豪(編)『教育人類学視野－中国民族教育的田野個案研究』346-453 民族出版社。
（日本語文献）
アイネル・バラティ
2009　「新疆ウイグル自治区のウイグル族女子教育について」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』4：105-121
アイネル・バラティ
2012　「中国少数民族文化の維持と継承に関する一考察　ウイグル族の教育状況を手掛かりとして」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』6：21-51
藤山正二郎
1999　「ウイグル語の危機」新免康(編)『アジア遊学（特集：越境する新疆・ウイグル)』1：40-53 、勉誠出版。
岡本雅享
1999　『中国の少数民族教育と言語政策』評論社。
小川佳万
2001　『社会主義中国における小数民族教育―「民族平等」理念の展開』東信堂。
費燕
2007「新疆におけるウイグル族の中国語教育、学習の現状について」『成城文塾』198：110-192 号。
丸山孝一
2010　『周縁文化の視座　民族関係のダイナミックス』九州大学出版会。
祖力亜提・司馬義、吾買爾江・艾山
2012 「新疆自治区における「民考漢」と教育言語問題－新疆大学中心に」大西広(編)『中国の少数民族問題と経済格差』220-242、 京都大学学術出版会。
崔淑芬

2012　『中国少数民族の文化と教育』中国書店。
（インターネット）
「中華人民共和国国家統計局」http://www.stats.gov.cn/tjgb/rkpcgb
「中華人民共和国教育部」http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/
「新疆維吾爾自治区教育庁」
http://www.xjedu.gov.cn/xjjyt/jxxw/zhzx/2010/26824.htm
「深圳市松崗中学」http://sgzx.baoan.edu.cn/content.aspx?news453257

（2016 年 1 月 4 日原稿掲載承認）